

大河ドラマ覚書

公益委員 長野信弘

監査委員の期間も含めると、県庁でちょうど40年間働いた。在任中は観光課勤務が長く、いくつか鹿児島を舞台にした大河ドラマ放映を経験したが、その中で今も心に刻まれている印象的なできごとについて、書き遺したいと思う。

1990年の大河ドラマ「翔ぶが如く」は、鹿児島初のご当地作品となった。西郷隆盛を演じた西田敏行さんは、実は会津のご出身で、はたしてこの役を引き受けていいものか思い悩んだ末に、最後は親族会議を開いて了承してもらったという。

「翔ぶが如く」放映当時、県内視聴者からの反響が大きく、県庁観光課には毎日のように様々な要望や問い合わせが寄せられた。

ベニヤ板で造られたロケ用の鶴丸城御楼門が、テレビの画面越しには、えらく立派に見えて、「もったいないから、放送終了後もそのまま残せ」というご意見があった。

吹けば飛ぶようなハリボテのセットは残せなかったが、30年後の2020年、官民連携の取組により、威風堂々たる御楼門が復元された。

「昨夜の放送で西郷さんが赤牛を引いて歩いていたが、鹿児島は黒牛じゃないのか」というお電話も受けた。今くらい、鹿児島黒牛の名が全国に鳴り響いていたら、NHKの番組制作スタッフも、迷わず黒牛を登場させたと思う。

2008年の「篤姫」の時は、観光課長を務めていた。放映前、ほとんど無名に近かった主人公のドラマは、回を追うごとに右肩上がりで見聴率が上昇し始めた。

7月に入って、NHKから「主演の宮崎あおいさんのスケジュール調整がついたので、鹿児島でトークショーを開催しませんか？」という連絡があった。いいお話だけれど、開催予定日まであとわずか3週間余りしかない。

まずは会場探し。どこも空きがなく、いきなり暗礁に乗り上げそうになったが、ありがたいことに、宝山ホールから「定期施設点検の日程を振り替えてもいい」と連絡があった。

すぐさま参加者募集に取りかかる。通常、往復はがきで応募してもらい、「応募者多数の場合は抽選」とするところ、今回は時間的な余裕がないため、やむなく先着順とした。

これで一応、イベントの枠組みは固まったものの、何せ急ごしらえで、実際に集客できるのか心許なく、客席が埋まらない場合、追加募集をどうするか思いを巡らせていた。

トークショーの参加者募集案内が新聞に掲載された当日、いつになく、始業前の観光課の廊下に人だかりがあった。よく見ると、皆、応募用の往復はがきを手にしている。まさか、確実に先着順を獲得するため、はがきを郵送せずに、直接持参する参加希望者がおられようとは、全く想定していなかった。

「これはもしかすると、追加募集しなくて済むかもしれない」と安堵したのも束の間。翌日、往復はがきで一杯になった大きなダンボールが、文書係から台車で運び込まれた。数えてみると、宝山ホールの定員1,500名を軽く超えている。篤姫人気はいつの間にか、とんでもないことになっていたのだと、ここに至ってようやく実感させられた。

直ちに募集打ち切りを発表して、ダンボール箱から抽選で当選者を決定したが、落選を知らせるはがきが届き始めると、今度は、課内の電話が鳴り止まない事態となった。

「朝、新聞で募集を知って、すぐに鹿児島中央郵便局まで行って投函したんだから、この私より早い人がいる訳がない」というようなクレームである。

「先着順のはずだったのですが、いっぺんにダンボール箱で届いたものですから」と、職員は連日、電話対応に追われた。

「何が何でも篤姫に会いたい」という、この恋焦がれるような思いに、何とか応えることはできないかとさんざん知恵を絞った末、三人寄れば何とやらで、「鹿児島中央駅前広場のアミュビジョンを使えば、人数制限なしにご覧いただける！」と思いついた。

当初は、宝山ホール屋上に大きなパラボラアンテナを立てて、駅前広場に向けて電波を飛ばし、時差なくトークショーを生中継しようかと考えたのだが、雷雨など荒天時には、うまく受信できない場合があるとのこと。仕方なくこの案は断念し、2時間遅れでビデオ録画を放映した。

当日の夜、アミュ広場は宝山ホールの定員を遥かに超える、熱烈な篤姫ファンでぎっしりと埋め尽くされた。

大河ドラマの仕事を通じて実感したのは、県民の深くて熱い郷土愛である。

出水の武家屋敷など、現地ロケの実施に当たっては、エキストラの募集・出演から撮影スタッフに対する細やかな心配りまで、多くの方々のお世話になった。

指宿今和泉には篤姫ガイドが誕生し、こんな才能を持った方々が今までどこに潜んでおられたのかと不思議に思うくらい、素人離れした話術と心温まるおもてなしで、ゆかりの地を訪ねる観光客に大評判となった。

「篤姫」の放映中、地元の南日本新聞には毎日のように関連記事が載った。当時の県観光誘致促進協議会の中原國男会長は、全ての新聞記事を切り抜き、メッセージとともにNHKの大河ドラマ制作チームに送り続けられた。東京のスタッフは、自分たちが制作しているドラマが、篤姫のふるさと鹿児島では、こんなに喜ばれているのだという手応えを、リアルタイムで感じ取ることができる。どんなに励まされたことだろう。

トークショー当日、舞台袖から宮崎あおいさんが登場した時の、ホール全体を揺るがす地鳴りのような歓声は、今でも耳の底に残っている。宮崎さんは一瞬、何かに打たれたように驚き、次の瞬間、大きな喜びに包まれた、とびっきりの笑顔になった。

ふり返ればこのシーンは、長い県庁生活の中でも忘れがたい、幸せな記憶の中のひとコマである。